

令和二年 度

滝川第二高等学校 入学 考査 問題

(二次) 国 語 (五十分・百点)

注 意 事 項

- 1 問題は1ページから14ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙に記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙は開いてはいけません。
- 4 考査番号を解答用紙と問題用紙に正しく記入しなさい。
- 5 解答用紙の※印の欄には記入してはいけません。
- 6 計算機能付き腕時計・電子辞書・携帯電話の持ち込みは禁止です。
- 7 「終了」の合図で鉛筆を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

<p style="text-align: center;">考査番号</p>			

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(①～⑧は段落番号を示す。指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含む)

① 人が成長していくために必要な体験として、私は「① 具体性」と「② 偶然性」をあげたい。 I 五感のひとつ、嗅覚。

② 夕方になって、街のあちこちから夕飯のにおいが a 漂ってくる光景をイメージしてもらいたい。おいしそうなにおいが、急に空腹な自分を思い出させる。湯気の立つ味噌汁、料理を家族で囲む食卓のイメージがぱっと頭の中に浮かんで、子どもたちは「そろそろ家に帰る時間だ」と気づく。

③ 田舎に行けば、豚を飼っていれば ※ 厩舎の独特なにおい、畑に行けば肥やしのおいといった「田舎の香水」がぶんぶんしていたし、森に入れば爽やかな緑の香りが私たちを優しく b ツツむ。

④ 人間の五感の中で、一番最初に働くのがこの嗅覚といわれる。人は、生まれて真っ先においを感知するのだ。生まれてすぐの赤ちゃんは大人の数十倍の嗅覚が ア あるといわれるが、その後、次第に目を使って親の c ソンザイを確かめ、耳で両親の声を聞き分けるようになり、それに伴って嗅覚優位が変化していく。しかし嗅覚は人間の感覚のベースに イ あるので、小さいとき、においで覚えた印象はしっかりと記憶として残っていく。だから ウ ある

特定のにおいを嗅ぐと、③ ふっと記憶が蘇ることが エ ある。

⑤ 今述べたようなにおいの光景は、最近では滅多にお目にかかれない。現代の、特に都市を中心とした生活でにおいを感じることは少なく、むしろできるだけにおいを消していこうとしている。こうした社会では、当然人間の五感そのものが働かなくなっている。

⑥ 嗅覚だけでなく、触覚の世界も大切だ。子どもたちが大好きな砂場遊びや、ままごと遊びで土をこねるときのひんやりしてざらざらした土や砂独特の感触は、子どもたちの触覚を大いに d 刺激する。「気持ちいい」「面白い」という感覚を呼び覚まし、遊びを次々と誘い出す。磨き込まれて、表面のつやつやした泥団子など、まさに芸術作品のようだ。

⑦ II、都市は道路という道路をアスファルトにして、土と接する環境を目の前から消してしまった。近所の公園も不審者が出没するからと、自由に遊びに行くことができない。マンションに住めば、ベランダのプランターで草花を育てない限り、土に触れることは滅多にない。子ども時代の土との経験が圧倒的に少なくなっている。

⑧ 小学生たちは多忙だ。朝起きたら朝食もそこそこに、身支度を慌てて済ませ家を出る。外に出て太陽の光とひんやりとした空気で身体をシャキッとさせ、冷たい水で顔を洗う。このような五感

を活性化させるごく自然な行為が、今はむしろ特別な「健康法」としてテレビで紹介されたりする。部屋の中はいつでも「快適な」状態で、^④人間のほうが自然に合わせて適応していくということも次第になくなってきた。

⑨ 「具体性の世界」とは、においや冷たさ、眩^{まぶ}しさ、あるいは土の手触り、雑草の青くささ、転んだときの膝の痛みのように、人間の感覚を豊かに働かせる世界のことだが、今、この世界はほとんど消失している。目の前にあるのは多義性が失われた、一義的で快適な世界。それは抽象の世界であり、偶然性が消されて必然化された世界だ。

⑩ 子どもの頃、よく近所で川遊びをした。表面に見えている石をリズムカルに踏みながら、上流に向かって駆けのぼる。踏み込んだ勢いでときどき石がごろつと傾いて、身体がバランスを崩す。だが、そうしたときも身体は逆向きに脚を蹴り上げて、瞬時にバランスを保とうとする。数歩先まで予測して、次に踏み込む石を瞬間的に選びながら、より速く、向こう岸へ。目的地まで辿^{たど}り着いたときには、「よし、やった!」とひとつのことをやり遂げた喜びを感じることができた。

⑪ これは、偶然性に富んだ遊びだ。誰のためでもない、自分のための小さな遊び。誰が評価するわけでもない、自分にとっての挑戦。冒険にもなり、うまくできたときは喜びにもなる遊び。

□ に対応する力や身体のかなやかさ、それに達成感という宝物を子どもは手に入れ、そして成長する。

⑫ 具体性と偶然性の世界に生きることは、人間がこれまで進化してきた過程の基礎にあるものだ。全身で感じ、工夫して遊び、モノをつくり、事をなしとげる。

⑬ これが、人間の活動の原点だと思う。何万年の進化の中でいいいに、大事にしてきたこれらが、今、私たちの生活から急速に消えようとしている。

※ 厩舎：牛や馬などを飼う小屋。
【^{しおみ}汐見 ^{としゆき}稔幸 『本当は怖い小学一年生』より】

問一 —— 線部 a ~ d で、漢字はその読み方を平仮名で、カタカナは漢字に直せ。(漢字は楷書で正しく書くこと)

問二 空欄 I ・ II に当てはまることばを、次のア~カ

からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書け。
ア たとえば イ なぜなら ウ あるいは
エ しかし オ つまり カ だから

問三 —— 線部ア〜オの中で、品詞の異なるものを一つ選び、その記号を書け。また、その異なるものの品詞名を漢字で書け。

問四 —— 線部①とあるが、筆者は「具体性」は何のために重要だと考えているか。「〜ため。」に続く形で本文中から十三字で抜き出して書け。

問五 —— 線部②とあるが、この「偶然性」に満ちあふれた遊びについて具体的に述べられているのは、どの段落か。段落番号で書け。

問六 —— 線部③とあるが、特定のおいを嗅ぐことよって記憶が蘇ることがあるのはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄 に当てはまることばを、本文中から十五字で抜き出して書け。

は、人間の中に記憶として残っているから。

問七 —— 線部④とあるが、このことは人間がどのような世界で生活していることを意味するか。最も適切なものを、次のア〜オから一つ選び、その記号を書け。

ア 植物や動物に人間が手を加えた結果、自然そのものが人間に合うように改変された世界。

イ 具体性や偶然性を軽視した結果、人類が自然におびやかされるようになった世界。

ウ 自然が減少したために、人為的に具体性や偶然性を日常に盛り込んだ世界。

エ 自然に対する分析が進んだために、あらゆるものの必然性が解明された世界。

オ 自然の多少の変化による影響や被害を即座には受けず、守られた安全な世界。

問八 本文中の に当てはまることばとして最も適切なものを、次のア〜オから一つ選び、その記号を書け。

ア 臨機応変 イ 用意周到 ウ 日進月歩

エ 不即不離 オ 五里霧中

問九 この文章で筆者が特に述べたかしたこととして、最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 具体性と偶然性の世界に生きるという人間の活動の原点に基づいた暮らしが、世界から急速に消えようとしている。

イ 人間の活動の原点には具体性があり、それは工夫して遊び、モノをつくり、事をなすとげること得られる。

ウ 現代は抽象的で一義的な世界なので、人間にとって具体性と偶然性に富んだ世界は必要のないものとなってきている。

エ 五感を活性化させる自然な行為は健康法としてすぐれているので、テレビで紹介されるのも当然、たと言える。

オ においにまつわる光景が私たちの周囲から消えていることは、私たちの嗅覚の記憶が消失していることを物語る。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含む)

(甲町源太郎は、高校の入学式に向かう途中で交通事故に遇った。乗っていた自転車が壊れたので、源太郎は歩いて学校に向かった。その途中で小さな捨て犬を見つけて、そのままはしておけないと思つて捨て犬を学校に連れていくことにした。源太郎が学校へ着いた時には、もう入学式が始まっていた。源太郎が入学式に遅刻し、そのうえ犬を連れてきたので、教頭は源太郎をしっかりとつけた。)

「交通事故に遇ったというのが、ことの発端です」

職員室で、甲町源太郎はその朝の出来事を語り始めた。

今日から高校生になったばかりだというのに、^a 妙に落ち着いた喋り方をする少年だった。涼しい顔でゆったりと喋る様は場違いなほどに堂々としている。

「登校途中に交差点を渡ろうとした時、僕の自転車と左折してきた運送屋さんのライトバンがはくわしまして。鉢合わせした勢いで横倒しになったものですから、^① こんな有り様です」

彼は堂本教頭の机の前に立たされていた。隣には担任となった山路先生も立っている。

源太郎は二人の教師に向かって肩や膝の破れた制服を指さしてみ

せた。職員室に来る前に保健室に寄ってきたので、顔や膝小僧には大きな絆創膏が貼られている。

ちよつとした人身事故だったわけだが、警察沙汰にはならなかった。ただでさえ寝坊していた源太郎は急いで学校に行きたかったし、運転手の方は会社に知られずのことを、オサめたがったのだ。怪我の治療費や自転車の修理代は全て運転手が責任を持つというこ
とで、示談はあっさり成立したのである。

「自転車は見事にひしゃげてしまいました、幸い体はかすり傷で済んだようです」

そう言つて満足げに頷く源太郎だったが、教頭先生は満足などしてくれなかった。眉間にくつきりと刻まれた皺は、源太郎が悠然と喋る間にどんどん深まつていく。

「元氣そうで何よりだがね」感情を抑えた声に皮肉な響きが滲んだ。「私は、入学初日から遅刻した上、^②入学式に犬など連れてきたのはどうしてかと聞いているんだ」

「ですから自転車が壊れてしまいました」皮肉などにはびくともしない返答だった。「それは相手の車で近くの自転車屋さんまで運んでもらったんですが、僕は学校まで歩くことになりました。僕も車に乗せてもらえばよかったと気づいたのは、しばらく歩いた後のことです」

そればかりは失敗だったという表情で、正面の教頭先生と隣の山

路先生を交互に見やる。源太郎は二人に向かって深く頭を下げた。

「初日から遅刻などしまして、申し訳ありませんでした」

十五歳の少年にしては実に折り目正しいお辞儀であった。しかし堂本教頭に対しては、余計に苛立ちを強めただけだったらしい。

「学校までの交通手段を聞いたんじゃない」唇の端にも深い皺が刻まれた。「いつになったら犬の話が出てくるんだね?」

刺々しい視線は途中から源太郎の担任教師に向けられた。この生徒と話していても埒が明かないという顔つきだったが、教頭から睨まれた山路先生には、サインだった。

睨まれたところで答えられるわけもなかったのだ。担任とはいえ二人は今日が初対面で、式の後にもゆつくり話をする暇などなかった。

おまけに入学式には背広姿で出席していた山路先生は、式の後でジャージの上下に着替えていた。もともと体育教師だからその格好が普段着だとはいえ、急いで着替えたのは子犬のせいである。――入学式の最中、膝の上で放尿されてしまったのだ。

片手で持てるほど小さな子犬だったから、量は大したことはなかった。しかし周囲には異臭が漂ったし、された場所が場所だった。膝から太股にかけてが濡れてしまったので、見方によっては山路先生自身が失禁したみたいだったのである。

彼としてはとつと子犬など放り出して汚れた服を何とかしたいところだったが、入学式の最中に持ち場を離れるわけにもいかな

い。濡れた感触に耐えながらじっとしている他なく、式が終わるや否いなや席を立った。生徒たちを教室に引率する役目は学年主任に代わってもらい、自分は子犬と甲町を連れて保健室に直行したのだ。

治療ついでに犬も保健室で預かってもらえることとなり、着替えを済ませた山路先生は急いで受け持ちクラスに戻ってホームルームを片付けた。しかしその後の掃除の時間には教頭からの呼び出しが待っていたのである。

そんな山路先生には、^③甲町という生徒とさっきの子犬が重なって見えていた。教頭を前にして落ち着き払っている甲町にも、※粗相した後ですやすや眠っていた子犬にも、全く悪びれた様子はな
い。犬は飼い主に似るとい言葉を思い出さずにはいられなかった。

しかし実際には、甲町少年が子犬の飼い主というわけではなかった。「あの犬とは、学校まで歩く途中の道ばたで出会いました」源太郎は制服のポケットをごそごそと探った。「自転車や車だったら気づかなかったでしょうし、命拾いした後に出会ったというのも何かの縁かと思ひまして」

ポケットから取り出されたのは折り畳まれた紙片だった。大きなマス目入りのノートの一ページで、たどたどしい子供の字が記されている。

『とてもかわいい すて犬です だれか どうか そだててください』
子犬とタオルの入られた木箱に添えられていた手紙だった。箱

には酒造メーカーのマークが印刷されていて、板きれで半分だけ蓋がしてあった。どうやら雨風を凌しのげるようという気配りのようで、その蓋に手紙が張りつけてあったのだ。

「きつと、捨て犬を連れて帰った小学生が、親からもう一度捨ててこいって言われて、泣く泣く書いた手紙だと思っんです。——そう思ったら、放っておけなくなりました」

源太郎はきっぱりと言った。さも当然という口調である。

「だからといって入学式に連れてくる※了見が間違っていると云って
るんだ」

教頭は吐き捨てるように言った。お前は小学生より始末が悪いとでも言いたげだった。

「学校に犬など連れてきたら周りに迷惑がかかるんだ。高校生にもなって、そんなことも分からんでどうする」

「私の方からも、よく言ってきかせますので」

山路先生も口を開いた。担任としても子犬の粗相の被害者としても文句があったのだ。

それに深く頷いてみせた堂本教頭だったが、お説教はここからが本番だった。

「軽率な行為で入学式を混乱させたことを反省したまえ。今だつて、その犬は保健室で預かってもらってるそうじゃないか。養護きだの岸田先生に余計な手間をかけて本来の仕事を邪魔してるという自覚

はあるのか？」

実際のところは、岸田先生は大の犬好きだった。恰幅かっかくのいいお袋さんという雰囲気の年配女性で、子犬のことも喜んで引き受けてくれた。しかし源太郎もさすがにそれは口にせず、無言で深く頭を下げた。

その反省ぶりを値踏みするように、^④堂本教頭は目を細めた。

「だいたい、君の家ではその犬は飼えるのか？」

「いえ……」初めて源太郎の顔が曇った。「うちは社宅で、ペットは禁止でして」

「そらみなさい」教頭は勝ち誇った声になった。「飼えもせん犬をどうする気だ」

^⑤源太郎は答えに詰まった。——とにかく学校まで連れていけば何とかなると思っていたのだが、正直にそんなことを打ち明けたらしたら説教が長引くのは間違いない。

今はとにかく嵐が過ぎ去るまで耐えるしかない。しかし教頭はさらに熱を込めて声を上げ、大きく手を振って後ろの壁に掲げられた書を指さしてみせた。

「その額の文字を読んでみなさい」

「ええと……自主、自覚、自立、でしょうか」

達筆で崩れた字は読みにくかった。しかし教頭の方では、すらすらと読めない昨今の若者にも腹を立てていた。

「我が校の教育精神だ。知らなかったのかね？」

「一つ一つの言葉は知ってますが、教育精神というのは初めて知りました」

源太郎は感心した眼差まなざしでその書を見上げている。教頭は彼のペースに巻き込まれまいとするように咳払いせきばらいをしてみせた。

「我が校に入学したからには、自分の行動に責任を持つことを覚えなさい。下手に捨て犬など拾ったら、それにまつわる責任を背負いこまなくてはならなくなるんだ。^⑥生き物の命に対する責任ということ

ことを、君は考えたのかね」

「……責任、ですか」

「そうだ。自らの責任を自覚できない者には、自主独立の生き方はできません。自立の道はおのれ己おのれというものを自覚するところから始まるんだ」

「はい」

源太郎は素直に頷いた。しかし態度とは裏腹に、頭の中では別のことを考えていた。

教頭の言葉の裏には、捨て犬など相手にするなという含みがあるようだった。命に対する責任などと言いながら、子犬を見殺しにしろと言っているようなものだ。

入学式を混乱させて迷惑をかけてしまった以上、ここで反論するわけにもいかない。しかし教頭の話は納得できなかったし、責任という言葉に対しては源太郎なりに思うところもあった。

「高校生活の第一歩からこういう失敗をしたのも一つの教訓だろう。君にはこの学校で、自覚の精神をたっぷり学んでもらうことになるが——」

説教はさらに続いた。喋っているうちに教頭自身も興が乗ってきたようだ。

しかし長い説教というのは時として逆効果を生む。説教にかけた時間と比例して、説教された側の反感が高まっていくこともあるのだ。

※ぼうよう 茫洋とした表情の裏で、^⑦源太郎は一つの決意を固めていた。

何かとのんびりしているせいで温厚で従順な性格に思われがちな源太郎であったが、ちゃんと歳と相応の反骨心も持っている。長い説教が頭の上を素通りしていく中、彼は教頭の考えとは正反対のことをやりたくなっていた。

自主だの自覚だの自立だのと言われても、どうも漠然としてぴんとこない。だけど自分の責任は何かと考えてみたら、やるべきことはあるはずだ。

自分の行動に対する責任、あの子犬に対する責任。

源太郎は、自分なりにその責任を果たすにはどうしたらいいのか考えていた。

ようやく説教から解放されると、源太郎は一階の隅にある保健室に向かった。子犬の様子を見ようと思ひ、玄関で靴に履き替えて外

からガラス戸越しに覗き込んだのだ。

室内では養護教諭の岸田先生が手を洗っていた。源太郎はまず彼女に声をかけようとしたのだが、その前に彼に気づいた者がいた。長椅子の上で寝ていた子犬である。

気配を察したのか、敏感に顔を上げて源太郎の姿を見つけたのだ。途端にキュンキュンという奇妙な甘え鳴きの声を上げ、小さな体で長椅子から跳び下りた。

千切れんばかりに尻尾しっぽを振りつつ、子犬は源太郎に向かって走った。源太郎がガラス戸を開けるより前に到着したものだから、勢い余って鼻面はなづらからぶつかり、甲高い悲鳴を上げている。

「あらあら、あらあら」

岸田先生は急に跳び下りて走り出した子犬に声を上げ、ガラス戸に突進するのを見てまた声を上げた。慌てて駆け寄って子犬を抱き上げ、その顔を覗き込む。

「おお痛かった痛かった。——まだガラスって物が分かってないのねえ」

源太郎はその言葉に促されるようにガラス戸を開け、今のも自分の落ち度だったみたいにぺこりと頭を下げた。子犬は再び恋しげな甘え鳴きを始めている。

「ガラスは分からないのに、飼い主さんはちゃんと分かってるみたいよ」

子犬の鼻面を眺めた岸田先生は、笑って彼を源太郎に手渡した。

——どうやら怪我はなさそうで、黒い鼻先には特に変化はなかったし、痛がつてもいない。子犬は自分の鼻をべろりと舐めてから源太郎の顔を舐め始めた。

「ですがどうやら……」源太郎は舐められながら口を開いた。「僕が飼い主さんになれそうもないというのが、問題でして」

「あらまあ」

教頭たちに話した家庭事情を繰り返すと、岸田先生も困った顔になった。

「私が飼ってあげられればいいんだけど、うちは猫が三匹もいるのよ。その子たちが家出しちゃっても困るしねえ……」

「どなたか、犬を飼ってくれそうな人に心当たりはありませんか？」

「そうですね、聞いてはみるけど……」

呟きながら、岸田先生はじつと子犬と源太郎を見つめた。

「でもやつぱり、これだけ懐かれたら甲町くんが飼うのが一番よねえ。この子、さつきまで長椅子の高さが恐くて下りられなかったのに、あなたが来た途端にすっ飛んでいったんだから」

「そうですね……」

そこまで好かれれば源太郎としても嬉しかったが、その嬉しさは困惑を伴っていた。まさか犬に合わせて家族みんなまで引越しようわけにもいかないし、懐かれれば懐かれるほど辛くなってしまう

のである。

そんな思いも知らぬまま、子犬は熱心に源太郎の顎のあたりを舐めている。

【竹内 真『ワンダー・ドッグ』より】

※ 粗相……ここでは、子犬が入学式の最中におしっこをしたことを指す。

※ 了見……考えや判断。

※ 茫洋……つかみどころのないこと。

問一 ——線部 a ｾ d で、漢字はその読み方を平仮名で、カタカナは漢字に直せ。(漢字は楷書で正しく書くこと)

問二 ——線部「制服」と同じ組み立ての熟語を、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 豊富 イ 寒暑 ウ 握手 エ 品質 オ 人造

問三 ——線部①とあるが、「こんな有り様」とはどのような有り様か。それが読み取れるひと続きの二文を本文中から探し、初めの七字を抜き出して書け。

問四 — 線部②について、この問いかけに対する源太郎の返答に教頭が苛立ちを強めたのはなぜか。その理由を説明した次の文の [] に当てはまることばを、本文中から九字で抜き出して書け。

源太郎が問いかけの答えにはならない、 [] を答えたから。

問五 — 線部③について、源太郎と子犬が山路先生には重なって見えた理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 源太郎と子犬の顔つきの一部に、どこかしら似ているところがあつたから。

イ 源太郎にも子犬にも、迷惑をかけていることへの悪びれた様子が全くなかつたから。

ウ 源太郎の優しさによって子犬の命が保たれていることを痛感したから。

エ 源太郎と子犬が問題を起こしたために自分が教頭から睨まれたと思ひ、源太郎と子犬へ腹が立つたから。

オ 子犬への源太郎の思いやりを子犬が察していなさそうなので、源太郎をふびんに感じたから。

問六 — 線部④とあるが、このときの教頭の様子の説明として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 源太郎が深く反省している様子を見て気分がよくなり、源太郎を優しくさそうとしている。

イ 源太郎の反省が本心からのものではないことに気づき、源太郎を徹底的に説教しようとして決意している。

ウ 源太郎が反省しているのかしていないのかわからないので、反省を促す言葉を発しようとしている。

エ 源太郎の様子を観察して、源太郎の反省の程度を見きわめようとしている。

オ 源太郎がどんなふうに関論してくるのかを予想して、それに対応しようとしている。

問七 — 線部⑤について、源太郎が答えに詰まったのはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄 [a] [b] に当てはまることばを、 [a] は二字、 [b] は六字で、それぞれ本文中から抜き出して書け。

教頭に対して [a] に弁明しても余計に [b] のは確実だと思つたから。

問八 ——線部⑥について、源太郎はこの教頭のことばを聞いて、教頭が本心ではどうしろと言っているように感じたか。本文中から九字で抜き出して書け。

問九 ——線部⑦について、源太郎はどのような決意を固めていたのか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 捨て犬を学校に連れてきた自分の行動に対する責任を、教頭の言いなりにはならず自分なりに果たそうという決意。

イ 捨て犬を拾ったのは自分なのだから、捨て犬の世話をできるように家族を説得しようという決意。

ウ 捨て犬に対する自分の行動を評価しない教頭が納得する反論を考えて、教頭を納得させようという決意。

エ 捨て犬をどうするかという判断を自分が考えるのではなく、岸田先生に判断をゆだねようという決意。

オ 捨て犬にどういう未来が待っているようにとも、自分がそのことで困惑するのはやめようという決意。

問十 この文章について説明したものとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 自分で責任を持ってないことはするべきではないということが、源太郎の行動にたくして述べられており、無責任な社会に対する痛烈な批判になっている。

イ 命に対する責任の重さについての考えが、それぞれの人物の立場で表されていて、命を大切にしようという警告を発する内容になっている。

ウ それぞれの人物の行動や考えが丁寧に描写され、表に出ない細かな心情や考えの変化などが読者に伝わる表現になっている。

エ できごとに真剣に向き合う人物の様子を描きながら、次第に人物どうしが心を開いていくという変化を感動的に表現している。

オ 人物それぞれの事情に基づいた、本心を激しくぶつけ合う様子を、捨て犬に対する人物それぞれの心情描写とともに表現している。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含む)

ちかき世、学問の道ひらけて、大かた^①よろづの[※]とりまかな

ひ、[※]さとくかしこく^②なりぬるから、とりどりにあらたなる説を

出す人^③おほく、その説よろしければ、世にもてはやさるるにより

て、[※]なべての学者、いまだ[※]よくもとのほぬほどより、^④われ

おとらじと、よにことなるめづらしき説を出して、^⑤人の耳をおど

ろかすこと、今のよのならひなり。その中には、ずゐぶむによろし

きことも、まれにはいでくめれど、大かたいまだしき学者の、心は

やりていひ出づることは、ただ人にまさらむ勝たむの心にて、かろ

がろしく、まへしりへをもよくも考へ合はさず、思ひよれるままに

うち出づる故に、多くは[※]^⑥なかなかなるいみじきひがごとのみな

り。すべてあらたなる説を出すは、いと大事なり。いくたびも[※]か

へさひおもひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまで

も[※]ゆきとほりて、たがふ所なく、[※]うごくまじきにあらずば、た

やすくは出すまじきわざなり。その時には、[※]うけばりてよしと思

ふも、ほどへて後に、いまひとたびよく思へば、なほわかるりけり

と、^⑦我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

【玉勝間^{たまかつま}】より

※ とりまかなひ：研究の方法。

※ さとくかしこく：うまく手ぎわよく。

※ なべての学者：すべての学者。

※ よくもとのほぬ：十分にできあがらない。

※ なかなかなるいみじきひがごと：発表しないほうがよかつた誤った学説。

※ かへさひおもひて：よくよく考えて。

※ ゆきとほりて：理論的にまちがいがなく。

※ うごくまじきにあらずば：確固とした学説でなければ。

※ うけばりて：はばかることなく。

問一——線部①・③を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書け。

問二——線部②の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア なれないとしても
- イ なったので
- ウ ならなかったので
- エ なれないので
- オ なったとしたら

問三——線部④について、どういうことか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 自分はまだ学説を発表できないということ。
- イ 自分は熟考してから学説を発表するということ。
- ウ 自分は他の学者とは競争しないということ。
- エ 自分は他の学者に勝てそうもないということ。
- オ 自分も他の学者に負けてはいられないということ。

問四——線部⑤について、どういうことか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

- ア 世間の人々が疑問に思うということ。
- イ 世間の人々を失望させるということ。
- ウ 世間の人々にあきれられるということ。
- エ 世間の人々をびつくりさせるということ。
- オ 世間の人々に笑われるということ。

問五——線部⑥について、そうなってしまう原因に学説の前後の内容が矛盾していることが挙げられている。では、その学説が矛盾してしまう原因は何か。本文中から十三字で抜き出して書け。

問六 — 線部⑦について、筆者のどのような様子が読み取れるか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 自分でも誤った学説を発表する可能性があると、気を引きしめている。

イ 自分は誤った学説を発表したことはない、自信をもって断言している。

ウ 自分も誤った学説を発表してしまったことがあると思い、反省している。

エ 自分に相談してくれれば、学説の誤りを指摘できるのにと残念がっている。

オ 誤った学説を発表する可能性がある、自分は学説の発表をひかえようと思っている。

問七 本文の内容を要約した次の文の空欄 a・b に当てはまることばを、a は六字、b は五字で、それぞれ本文中から抜き出して書け。

最近 a を発表する人は多いが、おおかた発表の態度が軽々しく、めずらしさをねらった誤った説が多い。よくよく考えて確かな b にもとづいた説でなければ発表すべきではない。

問八 「玉勝間」は江戸時代に成立した作品だが、同じ時代に成立した作品を、次のア～オから一つ選び、その記号を書け。

ア 竹取物語 イ 万葉集 ウ 徒然草

エ 更科日記 オ おくのほそ道

